平成十五年八月二十八日 富岡東高等学校

群 馬 の 万 葉 歌

群馬県立女子大学 北 Ш 和

秀



郡界は寛文八年(1668)の上野国郷帳の村名に基づき推定した。

- 1 -

3406

上毛野佐野の茎立ち折りはやし吾は待たむゑ今年来ずともカッザワナッ。

です。 私の恋は今も切ない。 吾が恋は現在

3403

もかなし草枕多胡の入野

の将来もかなし

そして(多胡の入野の奥ではないが)将来も切ないこと

3402

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ

碓

氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはっきりとお振りになりました。

3415

上毛野伊香保の沼に植ゑ小水葱かく恋ひむとや種求めけむ

しもうとして、 上野国の伊香保の沼に植えている小水葱ではないけれど、私はこんなに恋に苦 わざわざ種(原因)を求めたのだったかなぁ。

たが今年はいらっしゃらなくとも。

上野国の佐野の青菜を折ってお料理を作り、

私はお待ちしますわ。

たとえあな

3411

多胡の嶺に寄綱延へて寄すれどもあにくやしづしその顔よきにた。 ね ぱせりな は

ああ、 多胡の峰に引き綱を掛けて引き寄せるように、頑張って言い寄ってみたけれど、 も靡かないでさ。)いくら顔が美しいからって。 憎らしいよ、水底に沈んでびくともしない石のようなやつめ。(ちっと

の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも

3413

利根川

上毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ益れます。

恋心は増していますものを。 あなたのことを傍らから見ていただけの頃よりも、 上野国の伊奈良の沼に生えている(まだ刈り取る前の)大藺草と同じように、 恋人同士になった今の方が

上毛野佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも

できましょうか。(できないでしょう。) 上野国の佐野のたんぼの苗を使った占いで結婚を決めました。 今さらどうにか

3420

上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ

上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまうように、親は二人を引き離します

けれど、私はあなたと離れたりしませんよ

伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ

伊香保の峰に雷よ鳴ってくれますな。 のですが、あの娘が怖がるものでね。 私にとっては別にどうということはない

伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり

3422

う恋心ばかりは、 伊香保風は、 吹く日も吹かない日もあると言いますけれども、 止むときがありません。 私があなたを思

*

・韓 亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし参考歌

(巻十五・三六七〇)

上毛野伊香保の嶺ろに降ろ雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたりかきつける

3423 上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではありませんが、 たやすく「行き」

過ぎる

ことができない、

あなたの家のあたりよ。

左和多里の の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ

3540

を交わさないまま来てしまいました。 左和多里の乙女に出逢ったけれど、 私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、 言葉

真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくはサックね トールル ザヤル

3560

私の恋する気持は 鉄を精錬する丹生の赤土のように、はっきりと表に出しては言わないだけです。

*

- 3

白真砂御津の埴生の色に出でて言はなくのみそ我が恋ふらくはいらまなご。かっしている

(巻十一・二七二五)

上 |野国の防人歌

4404 難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかもぬにはち

右の 一首は、 助丁上毛野牛甘のなり。

難波への道を行って帰って来るまで御無事でと、妻が着けてくれた紐が、 長い

わが妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるとも吾は解かじとよ 右の一首は、 朝倉益人のなり。

切れて糸のようになってしまっても私は解くまいと思っているよ。 私の妻が、「私を思い出すよすがにしてください」と着けた紐は、 たとえ擦

わが家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも 右の一首は、 大伴部節麻呂のなり

もらうのになぁ。 私の家に行く人がいてくれたらなぁ。そうすれば、 旅はつらいと告げに行って

ひな **曇り碓日の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも**<

4407

の一首は、 他田部子磐前のなり。

二月二十三日に、上野国の防人 部領使 大 目正六位下上毛野君駿河が る歌の数は十二首なり。 但し拙劣なる歌のみは取り載せず。 た で まっ れ -- 5

碓 氷峠を越える時に、 妻のことが恋しく思われて、 忘れることができませ μ

足利駅に達る。此れ便道なり。而るに枉りて上野国邑楽郡より五箇駅を経めるまや、これ、人んだう、しか、まが、おはなき、こうののまた公使繁多くして祗供堪へ難し。その東山の駅路は上野国新田駅より下野国くり、けっぱく、「武蔵国は山道に属ると雖も、兼ねて海道を承けたり。大政官奏すらく、「武蔵国は山道に属ると雖も、兼ねて海道を承けたり。

近し。而して此を去り、彼に就くこと、損害極めて多し。臣ら商量するに、東山道東海道は、相模国夷参駅より下、総国に達るまで、その間四駅にして往還便ちて武蔵国に到り、事畢りて去る日に、また同じき道を取りて下野国に向ふ。今

奏するに可としたまふ。

続日本紀宝亀二・一〇・二七

公私所を得て、

人馬息ふこと有らむ」とまうす。

を改めて東海道に属らば、

東歌に多く詠まれている植

麻: 6、 柳... 6、稲... 4、 菅 : 4、 おけら... 3、 松 : 3、 葦 : 2、 真木... 2、

葛.. 2、 萱... 2、橘... 2、子水葱... 2、 小竹:. 2、 榛 : 2、

藻 : 2、

昼顔.. 2、

薄 : 2、

蓴菜... 2

3万葉集全体で多く詠まれている植物

萩... 1、梅... 1、橘・花橘... 107 菅・山菅... 74、 松 : 74 葦

55

茅・浅茅... 5、柳・青柳... 4、藤・藤波... 4、 桜 : 41

4 母

何とか是の子の御名を称はむ。」とのらす。 古事記中・垂仁天皇天 皇、其の后に命 詔して言らさく、「凡 そ、子の名は必ず母名けむを、するのは、 そ きゅき きょんじ

たらちねの母に知らえずわが持てる心はよしゑ君がまにまに

- 一・二五三七 作者不明

汝が母に嘖られ吾は行く青雲のいで来吾妹子逢ひ見て行かむゅ 東歌 (未勘国)

たらちねの母に障らばいたづらに 汝 もわれも事成るべしや - 一・二五一七

たらちねの母に申さな君もわれも逢ふとは無しに年そ経ぬべ - 一・二五五七 ㅎ 作者不明

5万葉集にうたわれている「母」 と「父」(歌数

父単独	父 母				母単独	
	対句	熟語	熟語	対		
	父先		母 父	母先		
_		— 九	八	五	四八	
() () () () () () () () () ()						
		、 (父母)	(<u> </u> =			

作者不明

万葉集巻十四(東歌)の配列

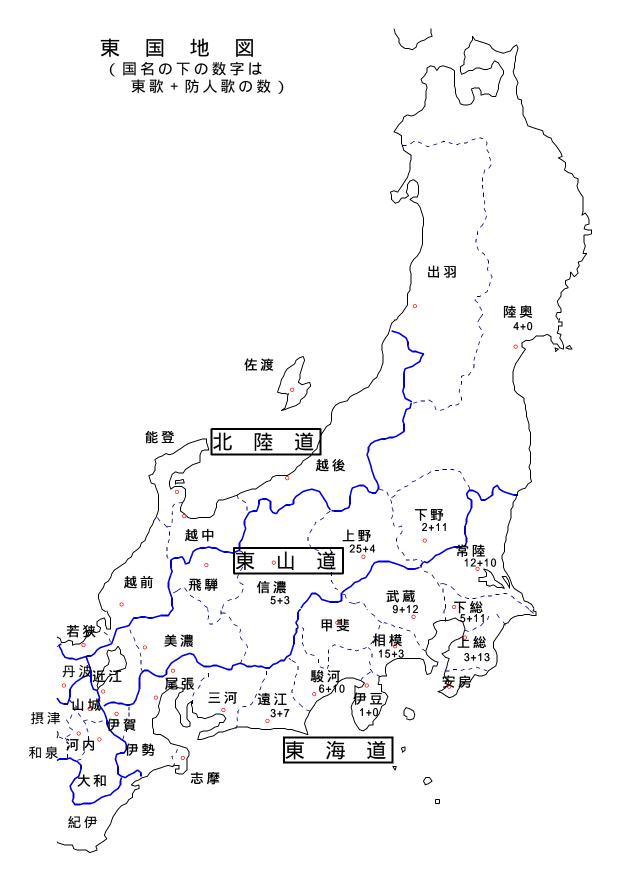
	1	1.60	1
国名判明	雑 歌 5	上総 1 首 下総 1 首 常陸 2 首 信濃 1 首	東海道東山道
	相聞歌	遠駿伊相武上下常信上下陸 1 2 2 1 6 1 6 1 6 1 6 1 6 1 6 1 6 1 6 1	東海道
	譬喩歌	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 上野 3首 陸奥 1首	} 東海道 } 東山道
国名不明 1 4 0	雜 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽 歌	17首 112首 5首 5首 1首	ここにも上野国の歌とおぼしきものあり

合計 230首

万葉集巻二十・防人歌

天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌





- 7 -